

視野を広げて、一歩踏み出してみる
そんな気持ちにさせてくれる
分身ロボット OriHime の不思議 発見!!

西村 隆 (芦屋市)

分身ロボット OriHime を知っていますか。ときどきマスコミにも登場します。例えば闘病中の父親が遠隔地で開かれる娘の結婚式に、自分の代わりに OriHime を通じて出席したとか、引きこもりの生徒が OriHime を介して少しずつ学校に行けるようになったなどです。

ただ、ロボットと聞いてピンとくるのはソニーのアイボやソフトバンクのペッパーのような最新のテクノロジーを駆使したものが頭に浮かんできます。実際に子どもが無菌室に入院したときや ALS を発病当初の私はアイボの仕草にどれだけ癒されたことか知れません。

ところが、OriHime はそうゆうロボットとは全く違います。分身ロボットとはなんぞや？

その不思議を発見してみたいと思います。

開発した株式会社オリィ研究所のホームページには、研究目的として「誰かの役に立つことをあきらめない」「寝たきりで声を失っても会話できる」「今の自分に合った働き方ができる」とあります。

まさに、ALS 患者の願望そのものではありませんか。この願望を具現化したものが OriHime です。

OriHime と一緒に東京・日本橋辺りを散策しませんか

事の始まりは言語聴覚士 (ST) の K さんから。

「OriHime カフェ DAWN(ドーン)のクラウドファンディングに参加したら OriHime を借りられることになりました。一緒に東京の日本橋辺りを散策しませんか」

ちょっと唐突に聞こえますが、二人は OriHime や開発した吉藤健太郎さんの本を読んで感銘を受けていました。でも、三步進んで二歩下がる私と違う K さんは着々と OriHime をたぐり寄せていました。

そこからツアー当日、2021年11月12日（金）を目指して入念な準備がスタートしました。

まずは、私のパソコンで OriHime を操作できるかです。パソコンには相性があります。そこにも K さんの人脈から神戸で障害者の作業所をしている F さんを紹介していただき、彼の持つ OriHime を使って操作確認をしました。作業風景がしっかり映り、音声もクリア。いくつかのジェスチャーも操作できました。このジェスチャーは OriHime のつばさ（手）を動かして話せない人もコミュニケーションに参加できるツールです。十数種類のジェスチャーですが、ゆたかな表現を生みます



DAWN の前で。OriHime は抱っこひもの中にいます

実を言うと 私は少し懐疑的でした

実は私はリモートが発達した今、わざわざロボットを連れて行って、風景を見ることにどんな意味や価値があるのか、少し謎（懐疑的）でした。頭でっちな私が考えたのは K さんが東京に行くご苦労です。100 万くらい包もうか、いや

いや飛行機をチャーターしようか。とかです。私の小心者が透けて見えます。

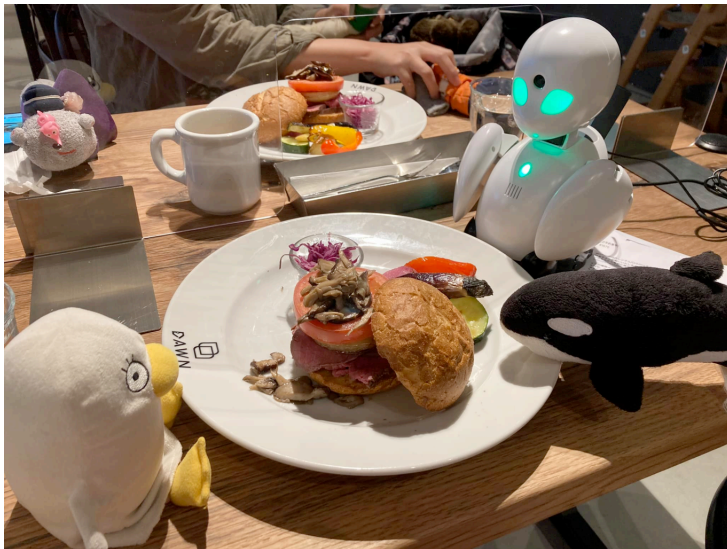
そして、わざわざ小型ロボットを介さなくても世界中の風景が見られます。近い将来、バーチャル技術が進歩したら、四畳半一間の狭い部屋に居ながらにしてハワイやパリのシャンゼリゼ通りも歩けるかもしれません。ニュースを見ていたら3Dプリンターを使ってお寿司をコピーした様子が映っていて、見た目どころか触感や味も本物と遜色ないそうです。「そんなあほな」

仮想空間やアバターやらチンプンカンプンです。

ツアーのはじまりはじまり

一抹の不安を抱きながら、OriHime 大作戦の当日を迎えました。1時から4時までのツアーに同行されたのは日本橋辺りに詳しいAさん（ぬいぐるみ専門旅行会社『ウナギトラベル』のツアーガイド）がKさんと東京から、芦屋の自宅からは、私と雅代をはじめ、のべ6人が参加しました。

はじめてOriHimeからの画像を見たときは拍手が起こりました。私は今でもパソコンが不具合のときはバンバンと叩いたり、「おーい、起きてるか」と機械に話しかけたりします。そんな昭和のアナログおやじにしてみれば無理からぬことです。



DAWNでのランチ。どうやって食べようか

OriHime はパイロットの分身

会話がはずむうちに表情が浮かび上がる

ここからが OriHime の本領発揮です。DAWN には接客をする OriHime が数台あって、その一台一台にはパイロットという遠隔地で操作、接客する人がいます。あっという間に私たちはたくさんの人とつながりました。九州から北海道、オーストラリアなどの海外からも、その人の暮らし方も実にさまざまです。

例えば、最初に出会ったパイロット、I さんは大阪で一人暮らし、難病 SMA で寝たきりですが、視線入力などを駆使して OriHime の操作をします。また、ALS の M さんにも手伝ってもらいました。大切なことはパイロットは賃金をもらう仕事だということです。必要なスキルも身につけなければならないし、責任がともないます。でもその声から楽しさが伝わってきます。OriHime はペッパーのようにお話をしたりはしません。あくまでもパイロットの分身です。例えばパイロットからはお客様の画像は見えますが、お客様からはパイロットの様子は見えません。

—そんなの不公平やないか—

ところが あら不思議、会話が弾むうちに無表情な OriHime から表情が浮かび上がってきます。



千疋屋でメロンジュース

DAWN をでると東京のど真ん中、日本橋です。古くは東海道五十三次の出発点として栄え、いろいろな映画や小説の舞台になっていますが、初日本橋です。糸井重里（コピーライター）のギャラリーでは興奮しすぎた OriHime が「静かに」と注意を受ける場面もありました。画面に没入しすぎるとこうなります。

街はどことなく落ち着いていて、テレビで見慣れた東京とはひと味違う散歩感があります。途中で OriHime に声をかけてくれる人もいて、うれしくなりました。映画の舞台にもなった麒麟（きりん）の彫刻や三越本店のライオンに挨拶して、アノ千疋屋でメロンジュースをいただきました。あっという間の日本橋ツアーは幕を下ろしました。思っていたよりも楽しかったシリアルでした。体験は大成功でした。めでたしめでたし。

おわり。

いやいや、これでは OriHime の不思議、発見とは言えません。年が明けてからニュースや知人から OriHime のことがさざ波のように聞こえてきました。中でも感銘を受けた一文があります。

OriHime のパイロットたち

人と仕事に出会い、新しい生き方、人生を歩いています

NPO 法人「境を超えて」のメールマガジン 31 号（2022 年 2 月）のコラムに掲載された OriHime パイロット Akane さんの文章です。ME/CFS（筋痛性脳脊髄炎/慢性疲労症候群）の当事者の彼女は、DAWN の他にモスバーガーや複数の店で接客をするほか、岡部宏生さんが代表を務める訪問介護事業、株式会社生成（きなり）の秘書もしています。それも青森からです。コラムの中で Akane さんは

「仕事を続けるうちに、ある感情が私の中に芽生えてきました。それは自信です」。また「できない」に取り囲まれて自分でも見えなくなっていた「できる」を発見することができました。

と書いています。まさに彼女は OriHime を通じて人と仕事に出会い、新しい生き方、人生を歩いています。

ツアー前に OriHime の動作確認に協力していただいた F さんは、いろいろなイベントを企画しています。例えば横浜こどもホスピスの子どもたちを OriHime

を通して「あかりバンク展」（阪急百貨店梅田）に参加を企画したり、ボッチャ大会を企画したりと可能性が満ちあふれています。Fさんは言います。

「OriHimeをレンタルするのは安くはない。だからこそ、何をしたいか、出来るか、を必死に考えます。OriHimeを生かすも殺すも人しだい」

OriHimeの不思議をもう少し深掘りしたい

私はALSを発病して20年以上がたちました。不思議なことに動けないALSの日常が当たり前になりました。あんなに神経質になっていたかゆみ、痛みも涼しい顔でうけながせます。達観とか受容とか肯定的な見方の一方で、「出来ない」「あきらめ」「我慢」を身に着けてしまい、可能性の芽を摘んでいたような気がします。視野を広げて、一步踏み出してみる。そんな気持ちにさせられる魅力がOriHimeにはあります。なんとなくウルトラマンに似ている容姿に魅せられて、OriHimeの不思議をもう少し深掘りしたいと思います。

皆さんも一緒にはばたいてみませんか



自宅からパイロットデビューする西村さん